

香川県立保健医療大学リポジトリ

『アントニーとクレオパトラ』に於ける自殺：
土なるこの世から火と空気の永遠へ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 稲富, 健一郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://kagawa-puhs.repo.nii.ac.jp/records/123

『アントニーとクレオパトラ』に於ける自殺：
土なるこの世から火と空気の永遠へ

稲富 健一郎*

香川県立保健医療大学保健医療学部教養部

Suicide in *Antony and Cleopatra* :
From Dungy Earth to Air, Fire of Eternity

Kenichiro Inatomi*

Department of Liberal Arts and Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

要旨

『アントニーとクレオパトラ』について、1784年に既にT. デイヴィーズ (T.Davies) は、クレオパトラが「女の手管」ばかりでなく、死を選ぶ精神の高貴さも示し、アントニーも彼女への溺愛から寛容さに至る「多様な情熱」を示していると指摘している。最近の批評は、初期の批評家達が興味を抱いた主題を追求している。中でも、両者のお互いへの愛情や自殺の意味を含めた人間像の追求が主となっている。

本論では、対立するローマとエジプトの価値観との関連に於いて、著名な批評家の論を参照しつつ、二人の死の意味が更に深く分析される。

Key Words: マーク・アントニー (Mark Antony), 自殺 (suicide), 現世蔑視 (contemptus mundi)

*連絡先: 〒761-0123香川県高松市牟礼町原281-1 香川県立保健医療大学保健医療学部教養部 稲富 健一郎

*Correspondence to: Kenichiro Inatomi, Department of Liberal Arts and Sciences, Kagawa Prefectural College of Health Sciences, 281-1 Murecho-Hara, Takamatsu, Kagawa, 761-0123 Japan

序 文

『アントニーとクレオパトラ』は、プルタークの『英雄伝』を基に、1607年頃に書かれた。ローマ共和政治末期、紀元前60年第一次三頭政治がジュリアス・シーザー、ポンペイ、クラッサスによって開始されるが、紀元前44年ジュリアス・シーザーが倒れ、彼の愛人であった21才のクレオパトラが3才の息子シーザリオン（Caesarion）とローマから逃れるのを、アントニーが助ける。翌紀元前43年第二次三頭政治がアントニー、オクティヴィアス・シーザー、レピダスによって開始され、それぞれエジプト、イタリア、アフリカを支配する。『ジュリアス・シーザー』の続編であるこの劇は、ジュリアス・シーザーが倒れてから4年が経過し、第二次三頭政治が既に行われている紀元前40年に始まり、オクティヴィアス・シーザーか、アントニーが独占的に支配することになるという状況になっている。

しかし、両者の気質は正反対であるので、協力関係を続けるのは不可能である。前者は一つの目的遂行のために、その他の全てのことを利用するような人間であるのに対して、後者は、前者のような singleness を持っていない。42才で彼は、29才のクレオパトラに、危険を冒して恋をする。妻に先立たれ、オクティヴィアス・シーザーの姉と結婚するが、やがて別れ、帝国の半分と自分の命も失ってしまう。結局オクティヴィアス・シーザーだけが生き残り、ローマを支配し続けることになる。

本論では、アントニーとクレオパトラの自殺の背景を明らかにするために、先ず、オクティヴィアス・シーザーとアントニーの対照的な価値観が考究され、次にクレオパトラ像が示され、最後にアントニーの葛藤が明らかにされる。

ローマ的価値観の代表オクティヴィアス・シーザー

ローマ人の美徳は、愛国心、自己修養、武勇、義務、責任、個人的な感情の抑制など、公の義務を個人の快楽に先行させることである。また、成功とは、勝利の数とそれによってローマ帝国に加えられる領土により、はっきりと計算できるものである。オクティヴィアス・シーザーは、ローマのそうした種類の美徳を表して、常に「判断力（judgement）」を働かせて、冷静に計算している。ブラッドレイはシーザーの冷静さについて、次のように語っている。「彼は目的のためにあらゆることを利用する。

例えば、自分の姉オクティヴィアがアントニーと結婚することを承諾したのも、彼が一種の罫を仕掛けたのかも知れない。アントニーが、やがて妻となるオクティヴィアを裏切って、クレオパトラのもとに帰るだろうという予測を立て、それを利用してアントニーを追いつつ落とそうと計算したのかも知れない。」

しかし、シーザーが常にアントニーを追いつつ落とそうと計算をしていたと、ブラッドレイ流に解釈すると、それと矛盾する箇所が思い出される。それはシーザーが彼の自殺の報に接して嘆く場面（5.1.35-48.）である。彼の失墜を絶えず狙っていたのであれば、そこで嘆く必要は全く無く、むしろ喜ぶのではなかろうか。ブラッドレイは、そのことに関して、次のように述べている。「シーザーは、個人の意志で左右することのできない『運命の人（the Man of Destiny）』として描かれており、アントニーと彼の星が相容れないものであったという嘆きは、本心から出たものであったかも知れない。」つまりブラッドレイは、シーザーがアントニーを追いつつ落とそうと狙っていたこと自体、自らの意思によるものではなく、星による運命であるとしている。

皮肉なことに、このように私生活を犠牲にして公の義務を優先させるローマ的美徳を、最も多く備えていた登場人物が、実はこの劇が始まる前の『ジュリアス・シーザー』の中のアントニーであった。従って、以前はアントニーが飢餓と戦い、馬の小便を飲んだり、アルプスの山中では、見ただけで死んだ者もいる怪しげな肉を食い、彼と同じ価値観の中に生きていたアントニーを、シーザーは賞賛しながら回想し、現在の墮落を嘆く（1.4.55-71.）。

しかし、こうした生き方はローマ的価値観、或いは、兵士の資質としては、優れてはいるが、エジプト的価値観、或いは、恋人としての資質としては受け入れられないものである。一言で言えば、アントニーは過去には理想的なローマ兵士であったのだ。

エジプト的価値観を示し、無限に変化する女王クレオパトラ

1 から 3 幕までは、世俗的で不道德で虚栄に生きた、計算高い女王が、4 から 5 幕では、堂々として、思慮深く、優しい別人になった女王が、描かれる。

先ず、彼女の国エジプトとあらゆる点で対照的であるローマでは、彼女はどのように受けとめられていたかを、知る必要があるであろう。それは、劇の冒頭で語られるアントニーの味方ファイローの台詞に、集約されている。ローマにとっては、クレオパ

トラは激しい情欲でアントニーを弄ぶジプシー女であり (1.1.10.), 売春婦なのである (1.1.13.).

また、同様にアントニー自身も、クレオパトラを激しく恋しながらも、彼女に裏切られたと誤解した時、彼女は多くの男を弄び、情慾だけに生きる売春婦で、「死んだシーザーの木の皿の冷えた食べ残し」、「ニーアス・ポンペイの残り物」で、「もっと熱い情欲の時をつまみ食いしていた」と、決めつける (3.13.116-20.).

このようにアントニーも含めローマの人々に、クレオパトラは気紛れで、ふしだらな、貞操のない女と見なされていた。

それでは、彼女の実像はどうであったか。クレオパトラは、ローマ的でないものを具現していて、感情は抑制するものではなく、受け入れ、洗練していくものだと考える。全く自然でのびのびと「情熱 (blood)」に生き、恥知らずで、嘘をついたり、騙したりし、情熱的、官能的、意識的であり、自分の魅力を誇り、移り気で、突然に気分が変化し、一瞬たりとも一つの気分を持続することができず、烈しい感情の中に生きている。彼女の溜め息と涙は「風と洪水、暴風と嵐 winds and waters, .../storms and tempests (1.2.149-50.)」である。従って、彼女を恋しているアントニーは、彼女に振り回されてしまうのである。アントニーの気持を挫いたり、魅惑したり、支配し続けたりするために、彼女は実際このむら気を意識的に使う。彼女の際立った特質とは、変化することのできる能力である。

年も衰えさせることはできないし、習慣も女王の無限の多様性を
陳腐なものにすることはできない。他の女なら相手の欲望を満たして
飽きさせるが、女王は、満足しても直ぐに欲しいと思わせる女だ。軽蔑すべきものも女王にあって魅力あるものになり、欲情している時でも
僧でさえ祝福せずにはおれない程だ。
Age cannot wither her, nor custom stale
Her infinite variety: other women cloy
The appetites they feed, but she makes hungry
Where most she satisfies: for the vilest things
Become themselves in her, that the holy priests
Bless her when she is riggish. 2.2.235-40.

彼女の感情は全て強烈なもので、愛をアントニーに伝えるために、必要ならば彼女の国民を全て犠牲に

してもいいと考える。

毎日、何度でもお便りを差し上げましょう、
エジプト中の人間を使者として動員しても。

He shall have every day a several greeting,
Or I'll unpeople Egypt. 1.5.77-8

彼女が感じることでできない唯一つの感情は、静かな感情である。彼女の感情は非常に強烈なので、道徳的な美德の特色を帯びて来る。この情熱の激しさによって「欠点をも素晴らしいものにしてしまう make defect perfection (2.2.231.)」力を彼女は持っている。他の人間であれば悪徳になるものが、彼女にあっては美德のようにみえてくるのである。それは正しくキーツ (Keats) が 'intensity' という語で表した、詩を生み出す重要な心理状態であると考えられる。アントニーがクレオパトラに言う。

お前には、何でも似合う、叱るのも、笑うのも、
泣くのも。どんな激情も美しく素晴らしく
お前の中で変化しようとしているのだ。

Whom every thing becomes, to chide, to laugh,
To weep; whose every passion fully strives
To make itself, in thee, fair and admired!
1.1.49-51.

最後の戦いで、クレオパトラがアントニーを置き去りにしたため、彼が負けた時、彼は彼女が彼をシーザーに売ったと言って怒る。彼女は、その怒りを恐れて、彼の名を呼びながら自殺したという伝言を彼に送る。彼は彼女がこの世を去ったと信じ込み、自分の剣の上に倒れて自殺する。アントニーの死によって、この世がただ退屈なものになってしまった時、彼女は変貌し、この世を去る時が来たと考える。

このように、ちょっとした女の手練手管 (feminine arts) から、ローマの市中を引き回される屈辱を受けるより死を選ぶ、高貴な精神に至るまでの、多様な情熱の激しさと、この世そのもののような暗い神秘に満ちた無限の変化 (infinite variety), 矛盾の集合体、完全な自然体、人間の根源的活力 (vitality) が、クレオパトラの本質であると言えるであろう。それは習慣によって色褪せることがなく、ハムレットやフォールスタッフなどのように、いつも人を驚かせ、戸惑わせ、喜ばせる。彼女の性格描写は傑作で、イモジェンとは極端な対照をなしており、一人の人間が両方の人物を描いたと信じることはできない

と、ハズリットが驚嘆している程である。クレオパトラはシェイクスピアが描いた女性の中で、最も活力に満ちている。

アントニーの葛藤

アントニーは、青春を過ぎて中年に達しており、もはやロミオのように若くはない。死が現実となり、世界が制限されて狭くなり、死刑囚のように、一瞬一瞬を喜びで満たそうとする年令に達している。彼の恋は深い。

彼は、クレオパトラにひかれ、支配される。しかも、アントニーは彼女に最も引き付けられている時に、彼女が危険であることを意識している。既に述べたように、彼女が不安定であるために、彼女に全てをかけている彼は、情緒的な安らぎを感じることができない。結局、オクティヴィアとの新婚早々、クレオパトラのもとに帰る決心をして、「私の喜びは東方にある I th' East my pleasure lies. (2.3.40.)」と語る。

クレオパトラもシーザーも、アントニーから忠誠を求める訳で、この二人はそうした点でライヴァルである。彼女は保護者として恋人として彼を求め、彼は敵からローマを守るために彼を求める。或る時は前者に引っ張られ、また或る時には後者に引っ張られて、アントニーは落ち着く事ができない。軍務によって、アレクサンドリアからローマに引き戻されるし、またクレオパトラの魅力に引かれて、ローマからアレクサンドリアに帰って来る。クレオパトラはその魅力で、オクティヴィアス・シーザーは、彼の義務感に訴えて、アントニーを引きつけて置こうとする。クレオパトラの魅力とシーザーに対する義務感との板挟みになって、アントニーは、どちらかを裏切らざるを得ない立場に追い込まれる。クレオパトラとローマを同時に持つことはできない。

アントニーのクレオパトラへの恋

それでは、アントニーの恋はローマ人にどう受けとめられていたのだろうか。これも既に触れたように、ファイローの冒頭の台詞の中に示されている。先ず、彼はアントニーの「溺愛 (dotage)」は度が過ぎていると、不満を漏らす (1.1.1-2.)。因に 'dotage' という語は、エリザベス朝に於いて、歳とった男性が若い愛人に対して持つ恋の愚かさを意味していた。ファイローはその後次のように語る。

ジブシー女の情欲を冷ます
ふいご、或いは、扇になってしまっている、(中略)
世界の三大柱の一つが売春婦の
道化に成り下がっている。
And is become the bellows and the fan
To cool a gipsy's lust...
The triple pillar of the world transformed
Into a strumpet's fool. 1.1.9-10, 12-3.

沈着冷静で、実際的な指導者である、オクティヴィアス・シーザーから見ると、彼自身とは対照的に、アントニーは、政治や義務や男らしさを全て忘れ、ジブシーであり、売春婦に過ぎないクレオパトラとの情慾、「淫らな酒宴 (lascivious wassails 1.4.56.)」に耽っている道化に過ぎない。

3幕の戦い半ばでも、その一例が示される。クレオパトラが逃げ出すと、何千という部下を見捨てて、彼女の後を追うような愚かなことまでする。「このような恥べき行動を見たことがない I never saw an action of such shame. (3.10.21.)」と非難されても仕方がない。こうした状況を、距離を置いて見ていたので、エノバーバスは離れて行くことができる。

大將殿、

脳味噌が減った分だけ、
奮い立ってくる。勇気が理性を餌食にし始めると、
戦うための剣までも食ってしまう。
離れる手立てを探そう。

I see still

A diminution in our captain's brain
Restores his heart: when valour preys on
reason,
It eats the sword it fights with. I will seek
Some way to leave him. 3.13.197-201.

アントニーの勇気は、理性の力が弱まるにつれて、いつも増大するということを、彼は見抜いている。こうした恋は正に 'dotage' と呼ばれるべきものである。

しかし、彼にとっては、クレオパトラは宇宙そのもので、彼女への恋は、広く、尊い。計算はこの世の帝国にのみ意味を持ち、卑しい行為であり、「計れるような愛には、乞食のようなもの (beggary) がある (1.1.15.)」。ローマ帝国より恋の方が広く、「糞のような (dungy)」大地より恋の方が尊い。帝国とは異なり、クレオパトラへの愛は、無限であ

るから計ることができない。その無限の愛を入れるには「新しい天と新しい地 (new heaven, new earth) (1.1.17.)」が必要だ。彼は彼女を愛するために生まれてきた。天を想像することは、彼女を想像することであり、死ぬことは彼女と一つになることであり、彼女を抱くことが「生の高貴さ (the nobleness of life 1.1.36.)」を表現することである。

アントニーのローマ観

逆にアントニーにとって、ローマ帝国はどのようなものであったか。既に引用したファイローの台詞の直後にアントニーは次のように言う。

ローマもタイバー河の中に解けてしまえ、整然とした帝国の
 広大なアーチも崩れ落ちよ。これこそ俺の宇宙だ。
 王国も土くれ同然。この糞のような大地は
 畜生にも人間にも見境なく餌をくれる。人生の高貴さは、こうすること。 [彼女を抱く]
 Let Rome in Tiber melt, and the wide arch
 Of the ranged empire fall! Here is my space
 Kingdoms are clay: our dungy earth alike
 Feeds beast as man: the nobleness of life
 Is to do thus; [embracing] 1.1.33-7

「ローマもタイバー河の中に解けてしまえ (33.)」というアントニーのこの叫びは、アントニーがオクティヴィアと結婚したとの知らせを受けた時の、クレオパトラの「エジプトもナイル河に解けてしまえ Melt Egypt into Nile! (2.5.78.)」という呪と呼応する。この世を象徴するローマ帝国は土くれのように脆いもので、動物の糞のように汚い、価値の無いものであるとして、彼はこの世を蔑視している。

オクティヴィアス・シーザーとアントニーの観点は、このように正反対であるので、彼らの生き方も正反対のものになるのは当然のことである。

この世の有為転変と死

この世では、世界も人も全てが変化し、生まれては、消滅していく。人間の感情も例外ではない。アントニーは妻ファルヴィアの死の知らせに接して初めて、良い妻だったと思い、押しのけた同じ手で、再び彼女を引き戻したいと思っている自分自身を観察して、好き嫌いの感情というものが、自分の意志とは関係なく、如何に容易く入れ替わるものである

かを、また逆に快樂に耽っている最中でも、それが胸が悪くなるようなものになることを悟る。

軽蔑して投げ[捨て]たものを
 また自分のものにしたくなる。また現在の快樂も、
 [運命の]車輪のある点が回って下にくるように、
 正反対の[疎ましい]ものとなる。
 What our contempts doth often hurl from us,
 We wish it ours again; the present pleasure,
 By revolution lowering, does become
 The opposite of itself: 1.2.124-7

更にアントニーは、感情だけでなく、人間の存在そのものも変わりやすく、実体のないものであることに気付く。既に述べたように、アントニーは最後の戦いで敗北するのだが、信じているクレオパトラに裏切られたと思った時、身を捧げてきた二つの理想、即ち、軍人としての名誉と恋の両方とも失ってしまったと考える。彼は自分の人格、自己という存在が、夕方の雲、或いは、水の中の水のように、消散し、消滅し、死んで見えなくなっていくのを感じる。これが人間の本質である。

アントニー お前も黄昏の印を見たことがあろう
 真っ暗な夕方の輝く雲の舞台を。

イアロス はい、閣下。

アントニー 今、馬であったものが、たちまち
 浮雲にかき消され、水の中の水のように、
 見分けがつかなくなる。

イアロス その通りで、閣下。

アントニー なあ、イアロス、今のお前の主人
 が正にそれだ。ここでは私はアントニーだ。
 だが、目に見えるこの姿を留めることは出来ぬ。

Antony thou hast seen these signs;
 They are black Vesper's pageants.

Eros. Ay, my lord

Antony. That which is now a horse, even
 with a thought
 The rack dislimns, and makes it indistinct
 As water is in water.

Eros. It does, my lord.

Antony. My good knave Eros, now thy
 captain is
 Even such a body: here I am Antony,
 Yet cannot hold this visible shape, my knave.
 4.14.7-14.

人間は死ぬことで、『嵐』の中のプロスペローの「消えてしまった幻想劇のように、跡を全く残さない。
 like this insubstantial pageant faded, /Leave not

a rack behind. (4.1.155-6.)」ハズリットは、この会話を、シェイクスピアの優れた詩の一つであると、言って賞賛している。それは、シェイクスピアが人間存在の変わり易さ、果かなさ、不確かさ、実体のなさを洞察し、それを万華鏡に映し出すように、雲や水の心象を使って詩的に表現することに、成功しているからであろう。

既に触れたように、この直後にマーディアンが、クレオパトラが死んだという、偽りの知らせを持って登場する。アントニーは、彼女が彼の命の全てを意味していたこと、彼女の死は松明の光が消えるようなものであることを、突然悟るのである。

鎧を脱がせてくれ、イアロス、長い一日の仕事は終わった、

眠らなければならない。(中略)

長く生きることは拷問だ。松明が消えたのだから横になり、これ以上彷徨うことは止めよう。

Unarm, Eros, the long day's task is done,
And we must sleep....

All length is torture: since the torch is out,
Lie down and stray no farther: 4.14.35-6, 46-7.

丁度ロミオがジュリエットの死の床に急ぐ時、I will lie with thee tonight.'と語ったように、アントニーも。

私も

死んで花婿になろう。走っていこう
花嫁のベッドへ向かうように。

I will be

A bridegroom in my death, and run into't
As to a lover's bed. 4.14.99-101.

両者にとって死は、悲しく嫌悪すべきものではなく、既に死んでいる恋人と一緒に寝ることができるベッドのように、心地良いものなのだ。キリスト教の神が存在しない、ローマ的、異教的価値観からすると、自殺は恋人と一つになることを意味するのであるから、好ましい行為なのである。

クレオパトラの壮麗な自殺の意味

アントニーとエノバーバスの自殺は哀れである。それと比較すると、クレオパトラの自殺は壮麗である。アントニーが死ぬと同時に、クレオパトラも「ランプが消えた Our lamp is spent, it's out!

(4.15.85.)」こと、「毎日昇る太陽の下に、目を引くものは何も無い there is nothing remarkable/Beneath the visiting sun. (4.15.67-8.)」ことを知って気を失う。その後、彼女は徐々に自分自身を見つめるようになり、リア王が一人の哀れな老人だと自分を認識できるようになったように、哀れなただの女だと思えるようになる。

もう[女王ではなく]ただの女、乳搾したり
卑しい下働きをする娘と同じように
哀れな感情に支配されている。

No more but e'en a woman, and commanded

By such poor passion as the maid that milks

And does the meanest chares. 4.15.73-5.

深遠の底に落ちたという認識から、彼女は新しい自己を発展させ、見事に自分の死を選び、絶望の深淵で愛情の強さを学ぶ。それは「欠点をも素晴らしいものにする to make defect perfection (2.2.231.)」彼女の最後で、最も壮麗な努力であると言える。五幕全部が、神秘的な変貌を遂げるクレオパトラが徐々に死を決意し、その準備をすることに当てられている。オクティヴィアス・シーザーが成し遂げた単なるこの世の成功に対して、先ず、軽蔑を彼女が表わすことから、その変貌は始まる。

私の寂しい状態が、より良い生活を
作り始める。シーザーであることは価値無し。
シーザーは運命の女神ではなく、召使に過ぎぬ。
運命の女神の意志の代弁者でしかない。
他の行為を全て終わらせることが偉大。
[人生の]偶然に足枷をし、変化を閉め出せる。
そうすれば、眠ってしまい、
乞食からシーザーまで養う糞を味わわないですむ。

My desolation does begin to make
A better life. 'Tis paltry to be Caesar;
Not being Fortune, he's but Fortune's knave,
A minister of her will: and it is great
To do that thing that ends all other deeds;
Which shackles accidents and bolts up change;
Which sleeps, and never palates more the dung,
The beggar's nurse and Caesar's. 5.2.1-8.

このように、運命による偶然と変化、それから生じる逆境に、人は自らの決意によって、打ち勝つことができるというストア哲学の真髓を、クレオパトラは学び始める。敗北したことを悟って、勝利は勝ち取る価値のないものだと確信するのである。アント

ニーを想像の中で、理想化し、追想する。その中では、アントニーという小宇宙 (microcosm) は広い大宇宙 (macrocosm) になっている。

あの人の顔は大空のようだった。
太陽と月が懸かって、それぞれの軌道を巡り、
この小さな丸い地球を照らしていた。
あの人の両脚は大海原をまたぎ、高く挙げた腕は
世界の紋章のようだった。あの人の声は
味方にとってだけ、天体の音楽のようだった。
一度、大地を震え上がらせようと思えば、
轟く雷鳴のようだった。あの人の恵みには
冬がなく、秋だけがあつた。
刈れば刈るだけ豊作をもたらし、あの人の喜びは
イルカの様、水に生き
背を水中に没することがなかった。王も貴族も
あの人の仕着せを着て歩き、国々島々は
あの人のポケットからこぼれ落ちる金貨だった。
His face was as the heavens, and therein stuck
A sun and moon, which kept their course and
lighted
The little O, the earth....
His legs bestrid the ocean, his reared arm
Crested the world: his voice was propertied
As all the tuned spheres, and that to friends;
But when he meant to quail and shake the
orb,
He was as rattling thunder. For his bounty,
There was no winter in't; an autumn 'twas
That grew the more by reaping: his delights
Were dolphin-like, they showed his back above
The element they lived in: in his livery
Walked crowns and crownets; realms and
islands were
As plates dropped from his pocket. 5.2.79-92.

このようにアントニー個人を大宇宙であるとクレオパトラは考えていたので、彼は「夢の大きさを超えた past the size of dreaming (5.2.97.)」存在となっている。彼女は、邪悪なこの世に囚人として留まるより、死後の世界において、想像の中で超人、或いは、半神となったアントニーと再び結ばれる方が良いと、その時までには考えるようになり、自殺を決意して、安定を得る。

何と粗末な道具（毒蛇）が
素晴らしい行いをするのか。あの男が自由（毒蛇）を持って来てくれた。
覚悟が決まってしまうと、私の中には
女々しさはもう全く無い。頭から足の先まで
大理石のように変わらない。移ろい易い月など

私とは関係ない。

What poor an instrument
May do a noble deed! he brings me liberty.
My resolution's placed, and I have nothing
Of woman in me; now from head to foot
I am marble-constant; now the fleeting moon
No planet is of mine. 5.2.235-40.

彼女は由緒ある王家の最後の女王として、衣と冠で盛装し、威儀を正して自殺の身支度をし、死を「より良い生活 better life」への入り口とするのである。

私は持っている
私の中に不滅の憧れを。もう
エジプトの葡萄酒がこの唇を濡らすことはない。
急いで、急いで、アイアラスよ、急いで。アントニーが
私を呼んでいるのが聞こえる、私の気高い行いを褒めるために立ち上がるのが見える。(中略)
私は火と空気。私の他の元素（水と土）は
卑しいこの世に残そう。

I have
Immortal longings in me. Now no more
The juice of Egypt's grape shall moist this lip.
Yare, yare, good Iras; quick. Methinks I hear
Antony call; I see him rouse himself
To praise my noble act;...
I am fire and air; my other elements
I give to baser life. 5.2.279-4, 288-9.

火と空気は四大元素の中で、高貴で霊的なものである。彼女は、土 (baser elements) の衣である朽ちていく「肉体 (muddy vesture of decay) (Merch. 5.1.65.)」を脱ぎ捨てて、「糞の大地 (dungy earth)」である卑しいこの世に軽蔑と共に返し、自分が純化され、既に霊のみになっていることを感じ、「香油のように甘く、空気のように柔らかく優しい」「より良い」世界に入ろうとしている。彼女の人生を支配してきた「移ろい易い月」による運命の変動に、死後には影響されないことを確信し、来世でアントニーと再び結ばれることを信じて、心の平安を得るのである。そして、二匹目の毒蛇を胸にあてがい、堂々と自殺して果てる。

しっ、静かに。
私の赤ん坊（毒蛇）が胸を吸って
乳母（私）を眠ら（死な）せようとしているのが
見えないの。
香油のように甘く、空気のように柔らかく優しい—

Peace, peace!
Dost thou not see my baby at my breast,
That sucks the nurse asleep?
As sweet as balm, as soft as air, as gentle—
5.2.307-10.

新しい生命である赤子が、乳母の乳を吸って眠らせるという、優しく美しい、生へ向かう心象で、単に死そのものである、蛇が毒を注入して殺すという、死へ向かう怖ろしい状況を、描くことによって、クレオパトラは、彼女にとって生と死が入れ替わって来ていることを示している。これは、ロミオにとって、金と毒薬との間で価値の逆転が起こったのと同様である。

結 論

自殺は、この世よりもあの世に価値を置くことによって、生じる行為である。クレオパトラと同様、アントニーも、死もしくは死後の世界にのみ安らぎを見出せる故に、この世より、あの世が better であると考ええる。

ハムレットは、神が禁じているとして、自殺をすることができなかったが、アントニーとクレオパトラは自殺する。それは罪とは考えられていない。ここでは、むしろ、自殺は二人の恋人を時のない永遠の楽園に連れて行くが故に、高貴で栄光に満ちたものとされている。『ハムレット』に於けるように、神が自殺を罪として禁じることはなく、英雄的行為とみなされているという点で、倫理的、宗教的に見て、この作品が、ローマの異教の価値観のもとに作られていることは、明らかである。

彼らを自殺に導いたものは、第一に、全く実体のない、果敢ない、この世の運命から解放されたいという願いである。アントニーがローマに引き戻される時に語ったように、この世の「時の強力な必然性 The strong necessity of time (1.3.42.)」や「移ろい易い月」に左右される運命から、あの世では開放されるからだ。クレオパトラも言うように、彼女の自殺も「偶然の出来事に足かせをして起こらないようにし、人生の危険な有為転変を、囚人として閉じ込めてしまう shackles accidents and bolts up change (5.2.6)」行為なのである。この世そのものである「偶然の出来事」や「有為転変」は、囚人のように危険であるので、自殺によって、この世という牢獄に閉じ込めることが出来る。

第二に、この世の蔑視である。クレオパトラは、自らは空気と火になって、卑しい元素である土からなっているこの世を蔑視し、それを後にして、あの世、即ち、永遠の世界にアントニーと生きたいと切望する。アントニーは1幕1場35行目で、クレオパトラは5幕2場7行目で、この世に‘dung’という語を与えて、この世を蔑視している。その二つの‘dung’は響き合って、その間に起こる多くの出来事に支えられて、アーチのように劇全体の上に架かっている。その‘dungy earth’での権力拡大以外に何の目的も、シーザーは持っていない。それ故、土を離れるという自殺行為は、土に執着するシーザーに対する勝利とも考えられる。また『ハムレット』とは異なり、ここには‘quintessence of dust’を暗示するものは何もなく、二人は‘all fire and air’の状態に入っていくのである。

これは‘What a piece of work is a man!’というハムレットの台詞を劇化した人間讃歌であり、シェイクスピアの天才が、ナイル川の氾濫のように、人間の多様性を作品全体に広げている。 S.O.

文 献

- 1) A.C.Bradley (1955) *Oxford Lectures on Poetry* (Macmillan), 285-305.
- 2) John Wilders (1988) *New Prefaces to Shakespeare* (Basil Blackwell), 226-30.
- 3) Maurice Charney (1993) *All of Shakespeare* (Columbia University Press), 293-4.
- 4) William Hazlitt (1966) *Characters of Shakespeare's Plays* (Oxford University Press), 75-9.
- 5) John Dover Wilson (1986) *Six Tragedies of Shakespeare* (Eihosha), 54.
- 6) W.J.Craig and Edward Dowden (ed.) (1962) *The Tragedies of Shakespeare* (Oxford University Press), 946.
- 7) John Dover Wilson (1968) *The New Shakespeare; Antony and Cleopatra* (Cambridge University Press), xx-xxxvi, 226-41.
- 8) Graham May (1981) *The BBC TV Shakespeare Glossary* (British Broadcasting Corporation), 114-21.
- 9) John Holloway (1986) "The Action of Antony and Cleopatra," *Shakespeare: Antony and Cleopatra* (Casebook Series), ed. John Russell Brown (Macmillan), 185.
- 10) Victor L. Cahn (1996) *Shakespeare The Playwright* (Praeger), 238.

Abstract

As early as in 1784, Thomas Davies contends that Cleopatra displays not only "feminine arts" but also a nobility of spirit in choosing death and that Antony also exhibits a "variety of passion" ranging from doting love to liberality for Cleopatra. Subsequent commentators have, for the most part, continued to discuss those issues which also interested earlier critics. Among them especially the portrayals of Antony and Cleopatra with the quality of their love for each other and the significance of their suicides, have been principal issues attracting reviews of the play.

In this paper the protagonists' suicides, together with the opposition of Roman and Egyptian views of the world, will be further analyzed. Celebrated commentators, such as W. Hazlitt, A.C. Bradley, D. Wilson, J. Wilders, M. Charney, V. L. Cahn, and J. Holloway will be referred to.

受付日 2007年10月31日

受理日 2008年1月21日